

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

藍色夏恋 (あいろなつこい) (BLUE GATE CROSSING)

2002年・台湾、フランス合作映画・84分

配給/ムービーアイ、トライエム共同

2003 (平成15) 年10月13日鑑賞

<三番街シネマ>

Data

監督・脚本：イー・ツイエン (易智言)

出演：チェン・ポーリン (陳柏霖)
/グイ・ルンメイ (桂綸金)
美) /リャン・シューホイ
(梁淑慧)

👁️👁️ みどころ

17才の少女の初恋を瑞々しく描いた台湾映画。2年間かけたオーディションで見つけられなかったヒロインは、台北市の西門町でスカウトされた素人の高校生。ちょっと「硬い」演技が、複雑で微妙な心の動きを映して、お見事。「思春期」という大切な言葉をあらためて思い出させてくれる秀作だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<台湾映画にも注目！>

この映画は2002年、第55回カンヌ国際映画祭をはじめとする世界各国の映画祭に出品され、多くの人々の共感を呼んだもの。

ハリウッド映画が圧倒的な人気を誇る台湾でも、この映画は2002年9月に公開されるや大ヒットを記録したそうだ。台湾映画は中国映画とも違うし、香港映画とも全く違う映画の世界だ。パンフレットにある暉峻創三氏 (映画評論家) の「台湾映画の伝統の樹木の先端に咲いた、開花したての一本」という解説によれば、台湾映画にニューウェーブを画したのは、1982年の陶徳唇 (タオ・ドゥツェン)、エドワード・ヤン、柯一正 (クー・イーチェン)、陳雨航 (チェン・ユイハン) の新人4人の監督によるオムニバス映画『光陰的故事』とのこと。そしてまた、ブリジット・リンやシルヴィア・チャンらニューウェーブ以前から活躍していた大スターが次々と香港に活躍の場を移していったため、台湾映画は「大スター」無しで映画をつくる必要性に迫られてきた、とのことだ。

そんな状況のため、台湾映画では、興行的に「大人以前、子供以降」の危うげな年齢にある男女の淡い恋心を描いた作品が多い上、若い無名の新人俳優を発掘して登用する必要性に迫られてきた、とのことだ。もちろん私はこんな事情を知る由もなかったが、なるほどそう言われてみれば、今回の『藍色夏恋』という映画の位置づけもよく分かるという

ものだ。

<ヒロインを演ずる役者は街でスカウトされた素人>

ヒロインの17才の高校生モン・クーロウを演ずるグイ・ルンメイ（桂綸 [金美]）は、この映画のために台北市の西門町でスカウトされた高校生だが、素晴らしい演技を見せる。オーディションで2年間かかっても見つけられなかったモン・クーロウの役に最適の「素材」と判断されたのだから当然かもしれないが、普通の17才の女の子とは少し違った、すごく「硬い」女の子を見事に演じている。

<面白い2人の女の子の対比>

17才の女の子、という目だけで見れば、恋心を描くチャン・シーハオ（チェン・ポーリン 陳柏霖）に対して素直に「好き」という気持ちを表わすリン・ユエチェンの方がかわいいと思うかもしれない。リン・ユエチェンを演ずるリャン・シューホイ（梁淑慧）は、映画はこの『藍色夏恋』がデビュー作ながら、既にテレビドラマやCMなどで、幅広く活躍していたタレントで、アイドル系の顔立ちをしたかわいい魅力的な女の子。

これに比べるとモン・クーロウはあまり素直ではない。また思春期特有の、心の中にあるさまざまなモヤモヤした気持ちを自分で整理しきれていない「危うさ」がある。

<「未来」は見えるか？>

映画の冒頭シーンでの2人の違いが面白い。それはモン・クーロウとリン・ユエチェンの2人が並んで座り、目を閉じて未来を語るシーン。リン・ユエチェンは、目を閉じると、自分が結婚し、優しい夫が語りかけてきている姿が見える、と素直に語る。そう、リン・ユエチェンには、自分が好きだと思い、恋い焦がれているチャン・シーハオに対してアプローチして、やがて彼と結婚し、幸せな家庭を築いている姿が素直に見える（想像できる）わけだ。しかしモン・クーロウは違う。リン・ユエチェンほど素直（単純）に自分の明るい幸せな未来が見えない（想像できない）わけだ。

冷めていると言えそうだし、利口だと言えそのとおりだが、私流の適切な表現を使えば、思いが単純ではなく、複雑なわけだ。

<ヒロインの行動はどこか不自然だが・・・>

だから彼女が親友の女の子に対して示す態度も少しごちないし、男（の子）に対する行動はもっと不自然。リン・ユエチェンの「告白」に同行させられた上、自分が矢面に立ってメッセンジャーの役割をしたり、リン・ユエチェンから頼まれてチャン・シーハオにラブレターを渡したり、モン・クーロウはリン・ユエチェンのために一生懸命動くものの、結果的には、それがから回りとなり、狙いと全然違う結果に。

そして結果的に、モン・クーロウはチャン・シーハオが自分に対して示す好意に戸惑わなければならないような事態になってしまう。

その上モン・クーロウは、自分の「異性」に対する気持ちが自分でもよく分かっている様子。だからモン・クーロウがチャン・シーハオに対して示す行動も必然的につつきんどんとなり、何かチグハグ。たとえば「ねえ、私にキスしたい？」という突拍子もない言葉を突然チャン・シーハオに対して投げかけてみたり……。モン・クーロウの、複雑であるがゆえの多少「分裂気味」の行動は、学校の体育教師に対しても、「ねえ、私にキスしたい？」と聞くシーンにも現れ、この教師を混乱させてしまうことになる。

思春期の女の子は複雑で多感……。それは当たり前か……。だから思春期の初恋は面白い。また複雑で、男の子に対してどこか硬くつつきんどん。そんな女の子だからモン・クーロウはすごく魅力的。そんなヒロインがモン・クーロウだし、これを演ずるグイ・ルンメイだ。

<「思春期」という大切な言葉と内容>

パンフレットの中で、川本三郎氏（評論家）が、「思春期という特別な時間」というタイトルで、実にいいことを書いている。

それは今、日本の少女には少女期や思春期という特別な時期が消えつつあるという指摘だ。その理由は、十代の子供たちがあまりにも早く異性ととのセックスを体験してしまうから。セックスを知ってしまうことで子供だけが持っている繊細な感情を失ってしまうというわけだ。「それに比べて、この映画の台湾の十代は、セックスを知らないがゆえに、少女期、思春期という特別な時間を生きている。もう子供ではない、といって大人でもない。人生のほんのある時期、微妙で危うい思春期の感情のなかで揺れ動いている。この映画は彼らを終始温かくとらえていて、清潔感あふれるみずみずしい青春映画になっている。」

私も同感で、同意見。よくぞ「コトの本質」を言い当ててくれた、と感謝したい。

<今のオトナのそれぞれの思春期は？>

今のオトナには、みんな自分の思春期の思い出があるはず。思春期の男が考えることは、女のこと、セックスのこと。それがすべてだと言っても過言ではないほど性への欲望が強い。その生理的欲求にモンモンとしながらも、精神的にこれを整理し、バランスをとっていく過程が1人1人の男の思春期なのだ。このセックス「体験」までの思春期を経ないで最初から安易にセックスをしてしまえば、思春期における男と女の初恋の価値なんかふっ飛んでしまうというもの。

「性」、「セックス」というものが遠いところにあり、自分にはまだまだ縁のない存在だと思っからこそ、それについての想像力が強くなり、時にはそれから逃げようとしていたり、時には別のターゲットに暴走したりという思春期特有のさまざまな「症状」が現われるの

だ。これは台湾でも、中国でも、日本でも同じだし、アメリカでも同じ。

2003年9月28日に亡くなったハリウッドの映画監督エリア・カザンが描いたジェームズ・ディーン主演の『エデンの東』（1954年）は、反抗する若者をテーマにした作品だが、多感な思春期の若者を主人公とした点では、この『藍色夏恋』と同じだ。とにかく思春期というのは大切な言葉。そして人間形成の上で避けて通ることのできない、貴重な内容を含むものだ、と私は思っている。

<面白い小道具としての、自転車、屋台、落書き>

モン・クローウとチャン・シーハオは高校生だから移動の手段は専ら自転車。従って自転車のシーンが数多く現われる。これは一方では、アパートの前に置いてある自転車に無造作に飛び乗って出かけることによって生活感にリアリティを持たせるとともに、他方では自転車のペダルを力強くこぎ、走り抜けていくことによって、主人公たちの解放感や疾走感をうまく表現するためだ。

また、モン・クローウの母親は屋台でギョーザとスープを売って生活しているが、ここを訪ねたチャン・シーハオに対するモン・クローウの母親の会話（アドバイス）が面白い。チャン・シーハオの「水ギョーザ20コ」との注文に対し、「うちのはでかいから15コで十分だよ！」と答えるモン・クローウの母親のセリフは本当に庶民的で飾りがなく、そのくせ、自分の店で売る商品への自信に満ちていて素敵だ。

そして学校の体育館の壁への落書き。日本人の私にはよく分からないが、台湾の高校生は自然にこういうことをやっているのだろう。

面白いのは、モン・クローウやチャン・シーハオによるその落書きのシーンを何度も見せながら、その内容をなかなか観客に見せないこと。一体何を書いているのだろう・・・？と興味津々だが、見せてくれないので少しイライラして。そして、やっと最後にその言葉が示される。それは・・・。映画を観てのお楽しみに。

<総論>

この映画は、予告編を一度見て、これは絶対観ておかなきゃと思って行ったもの。

日本の若者（17才の少女）の多くが失った（？）思春期の初恋、しかもハッピーエンドで終わることなく、未来へ持ち込むであろう2人の初恋を見事に描いた秀作だ。私が中学、高校時代に通った3本立て55円の日活映画での浜田光夫＝吉永小百合、山内賢＝和泉雅子等の純愛コンビで観た日活青春映画路線とは一味違う、台湾の「初恋」事情をよく理解することができた。

久しぶりに「ビバ、青春！」と叫ぶことができる映画にめぐり会うことができ感謝。『藍色夏恋』でヒロインに抜てきされたグイ・ルンメイは、現在は台湾の大学に在学中で、ネスレのコーヒーCMに出演しているが、芸能活動に専念する予定はないとのこと。「一発屋」

で終わらず、その「硬質な魅力」やそれが「大人の女」に変わっていく過程の魅力を是非見せてほしいと思うのは、私1人ではないだろう。

2003（平成15）年10月14日記